

世界は柔道をどうみているか

——国際研究から読み解く柔道の現在地——

教育普及・MIND委員会 特別委員
文／曾我部晋哉(甲南大学教授)

本連載では、世界で展開されている柔道・武道に関する研究や論考をもとに、「柔道とは何か」「社会の中でどのような役割を持ち得るのか」を考えていきます。国際的な視点に触れることで、日本の柔道をあらためて見つめ直し、その価値と可能性をこれからの時代にどう生かすかを探っていきます。

第2回 柔道とは何かを問い直す

—他者との関係から見える柔道の本質—

PICK UP

柔道は、青年期では技を学び、強くなることが活動の中心に据えられがちである。試合で勝つことや技術を高めることは重要な側面であるが、それだけで柔道の全体像を捉えきれているとは言えない。柔道は一人では成立せず、常に相手との関係の中で展開される実践である。とりわけ受け(uke)の存在は、単なる補助ではなく、学びそのものを成立させる基盤である。この点に着目し、「柔道とは何か」という根本的な問いを投げかけ続けているのが、フランス・トゥールーズ大学の イヴ・カドー 教授である。カドー氏は柔道を、技術や競技に還元されるものではなく、他者との関係を通して自己を形成していく文化的・教育的実践として捉える。本稿ではその視点を手がかりに、柔道の本質と現代における意義をあらためて考えていく。



イヴ・カドー氏

Yves Cadot

Université Toulouse Jean Jaurès(トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学)の准教授(maître de conférences)として日本語・日本文化を教える一方、柔道の教育的価値を研究・実践の両面から発信している。フランスの日本研究者であり柔道教育学の専門家。欧州柔道連合では教育ディレクター(2021-2022)、フランス柔道連盟アカデミー委員を務め、柔道教育プログラムの国際展開に貢献。



柔道は「技術」ではなく「関係」である

カドー氏が示す最も重要な視点は、柔道を技術体系としてではなく、他者との関係の中で成立する実践として捉える点にある。柔道は一人では成り立たない。常に相手が存在し、その相手との関係の中で動き、学び、変化していく。

とりわけ彼が重視するのが「受け(uke)」の存在である。柔道において受けは単なる協力者ではない。技を成立させるために不可欠であり、同時に学びを支える存在でもある。したがって柔道とは、相手を倒す技術ではなく、相手と関わる中で自己を形成していく過程なのである。

「柔道を教える」のか、「柔道で教える」のか

また、柔道教育に対して、根本的な問いを提示している。それは、「柔道を教えているのか、それとも柔道を通して人を育てているのか」という問いである。

もし柔道が技術の習得にとどまるならば、その価値は限定的である。しかし、柔道が他者との関係、規律、自己理解といった要素を学ぶ場として機能するならば、それは単なるスポーツを超えた教育的実践となる。

重要なのは、柔道の中にその可能性があるかどうかではない。その可能性を、どのように引き出しているかである。

柔道は変わり続ける存在である

彼は柔道を固定された伝統とは捉えない。柔道は時代や社会とともに変化し、その意味もまた変わり続ける存在であると考えている。

競技化が進み、勝敗が強調される現代においても、柔道の本質が失われたわけではない。ただし、その本質は自動的に保たれるものではない。柔道の意味は、日々の実践の中で問い直され、選び取られていくものである。

日本の柔道に求められる視点

日本において柔道は、長い歴史と文化を持つ一方で、その価値が「当たり前なもの」として扱われてきた側面もある。しかし、社会が大きく変化



する中で、柔道の意味を改めて言葉にし、社会に示していく必要がある。そのためにも、技術だけでなく、関係性や学びの構造を意識した実践が求められる。

彼の問いは単純である。

「柔道とは何か」。

しかし、その問いに向き合うことは容易ではない。柔道を技術として扱うだけであれば、答えはすぐに出る。しかし、柔道を人と人との関係、社会とのつながりとして捉えるならば、その答えは一つではない。

柔道は完成されたものではなく、問い続ける存在である。だからこそ、その価値は未来に向かって開かれている。

その問いを引き受けることこそが、これからの柔道に求められている姿である。

1) Cadot Y : What is judo? What does it have to say nowadays? Proceedings book of the 6th European. Judo Science & Research Symposium. 7-10, 2019.

2) Cadot Y : Du judo et de sa valeur éducative comme pédagogie. Metatext. 259p. 2013

3) Cadot Y : Pédagogie du judo ou par le judo ? Questionner une pratique globale. Université de Namur. 2019.

OPINION

現代の日本社会は、成果や結果が過度に重視され、過程や関係性が見えにくくなっている。こうした環境では、人は他者と向き合いながら学ぶ機会を失い、失敗から立ち直る力も育ちにくい。柔道は、勝敗だけでなく、相手との関わりの中で自らを見つめ直す経験を内包した実践である。この価値を競技の枠に閉じ込めるのではなく、評価や教育の在り方に生かしていくことが重要である。結果だけで人を測らない社会へと転換していく視点を、柔道は示しているのではないだろうか。
(曾我部晋哉 甲南大学)